第４章　大塚塚根遺跡の調査

１．調査の経過と方法

大塚塚根遺跡は、西伯郡名和町大字大塚字塚根に位置する。今回の調査地の北側において名和町教育委員会が行った発掘調査により９世紀～10世紀の集落跡が確認されていることから、本調査地においても同時期の集落遺構の検出が予測された。

調査は、10月10日より開始した。重機により古墳時代～近代の遺物を含む包含層とみられるやや暗い灰褐色土（③層）までの除去を行った。その後グリッドを設定し、層位ごとに遺物の取り上げを行いながら掘り下げを行った。グリッドは、調査区の形状に合わせて任意に10mメッシュを設定した。東側の杭を№０杭とし、これを基準に調査区の主軸方向に９本の杭を設定した。各グリッドの領域は、西側の杭№を基準にした。

黒褐色土（④層）中において約410点の遺物が出土し、黒色土（⑤層）直上に遺構面が想定された。ただ、遺構埋土、遺構ベース面ともに黒色土であるため、明確に遺構を認識できない。このため、トレンチにより遺構の存在を確認後、人力により黒色土の除去を行った。下層の暗褐色土（⑥層）上面において、土坑１、溝状遺構１、ピット41を検出した。精査、記録作業の後、11月21日にすべての作業を終了した。

２．基本層序（Fig. 1）

遺跡は、大山の火山噴出物により形成された扇状地状の台地上に位置する。現状での地形は、南から北に向かい若干傾斜しており、東西方向はほぼ水平をなす。しかし、土地改良事業に伴う客土により改変を受けており、東西方向における本来的な地形は、№４グリッド付近を頂点とする南北方向の緩やかな尾根状を呈していたものと考えられる。現在の地表面での標高は、30.50m前後である。現地表下約40～50cm程度は、土地改良事業に伴う客土であり、その下層に近現代の水田床土、さらには古墳時代～近代期の遺物を包含する灰褐色土（③層）が堆積している。

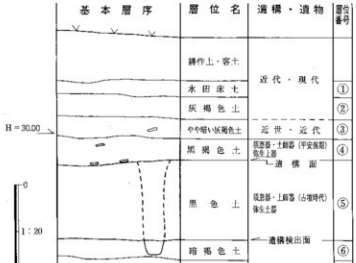


Fig. 1　基本層序図

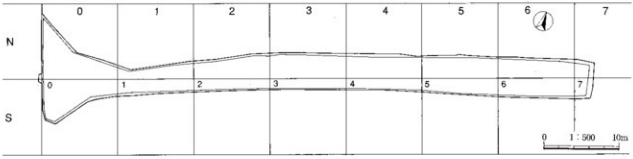


Fig. 2　調査区グリッド配置図

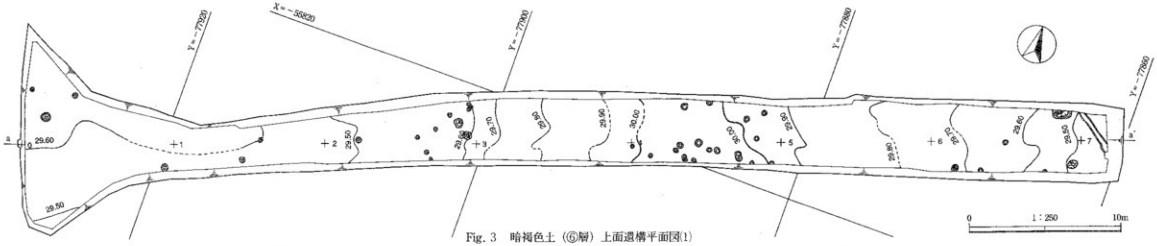


Fig. 3　暗褐色土（⑥層）上面遺構平面図(1)

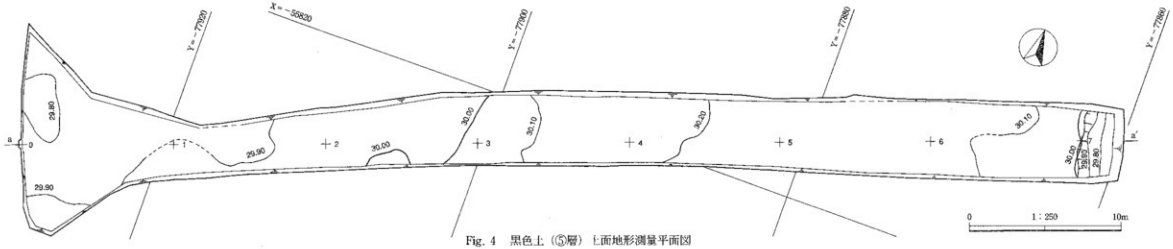


Fig. 4　黒色土（⑤層）上面地形測量平面図

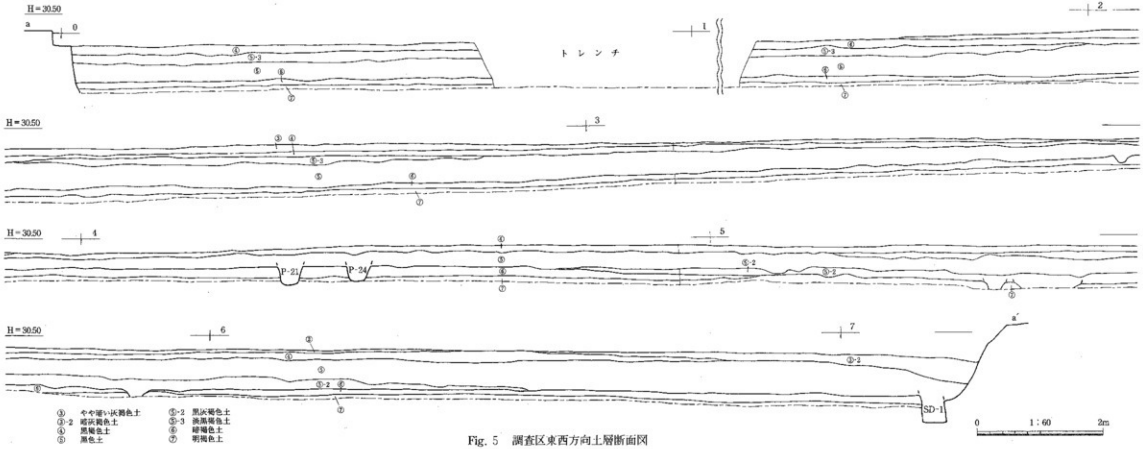


Fig. 5　調査区東西方向土層断面図

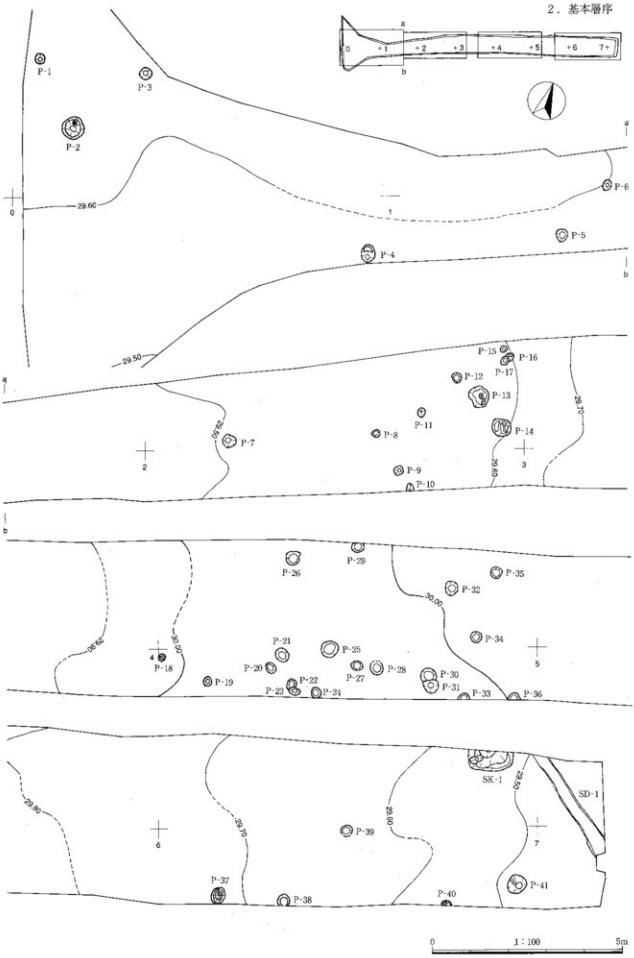


Fig. 6　暗褐色土（⑥層）上面遺構平面図②

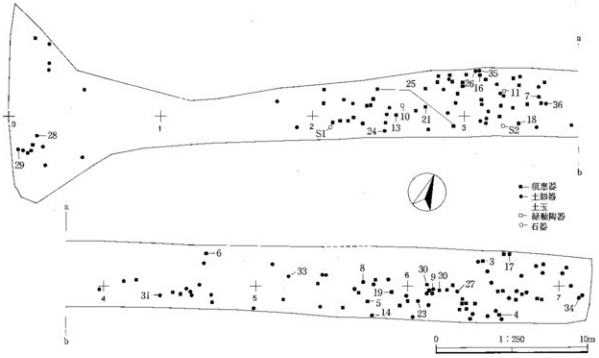


Fig. 7　黒褐色土（④層）出土遺物分布図

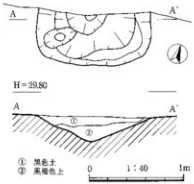


Fig. 8　SK－1 遺構図

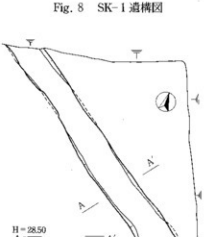


Fig. 9　SD－1 遺構図

標高29.5～30.0m前後は、大山の火山噴出物に由来する黒色土系の土壌である。このうち、⑤層上面に９世紀後半～10世紀前半の遺構面の存在が推察される。さらに、黒色土と下層の明褐色土の間には漸移的に暗褐色土（⑥層）の堆積がみられる。⑥層上面において遺構検出を行った。⑥・⑦層において遺物は出土していない。

３．発掘調査の成果

(1)　暗褐色土（⑥層）上面検出の遺構（Fig. 3・6）

地形は、№４グリッド周辺が標高30.0mで最も高くなる緩やかな尾根状をなす。暗褐色土直上から遺物は全く出土していない。また、後述するが、検出したピット内から出土する遺物と、⑤層直上（④層）において多量に出土した遺物の様相に大きな差違が窺えないことから、検出した遺構の大半は本来⑤層上面から掘削されたものと考えられる。

SK－1（Fig. 8）

№７グリッド調査区北端に位置する。北側半分は調査区外である。規模は、東西1.2m、南北0.5m以上、検出面からの深さは最も深い中央部において25cmである。断面は、中央部が窪むすり鉢状を呈する。埋土は、黒色系の土であり自然堆積とみて矛盾しない。遺物は出土していない。

SD－1（Fig. 9）

№７グリッド調査区東端に位置する。北西－南東方向を主軸とする遺構である。幅は30～34cm、深さは40～43cmである。底面のレベルはほぼ水平である。断面は方形を呈し、部分的に袋状となる。埋土は、黒色土であり、暗褐色土上面で検出した他の遺構との差違はみられない。②層（Fig. 9）

Fig. 10　ピット埋土中出土遺物実測図

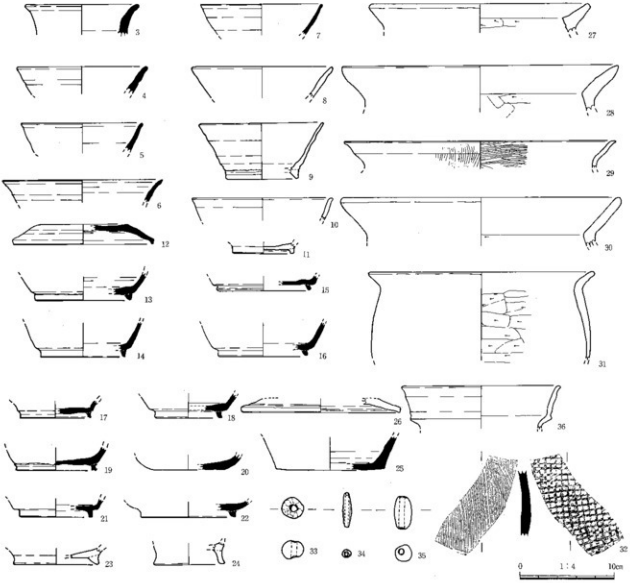


Fig. 11　黒褐色土（④層）出土遺物実測図（土器）

の状況が、自然堆積とみるにはやや不自然であり、掘り直しが行われた結果とも看取できる。砂の堆積など流水の痕跡は窺えない。遺物は、出土していない。

ピット群（Fig. 3・5・6　Tab. 1）

ピット41個を検出した。調査区全域に分布するが、No 2～No 4グリッド周辺はその密度が高い。比較的標高の高い地点を選地し、集落を形成したものと推察される。検出面からピット底面までの深さは、10～25cm程度である。埋土は、いずれも黒色土を呈する。

ピット埋土中から出土した遺物は僅かである。土師器

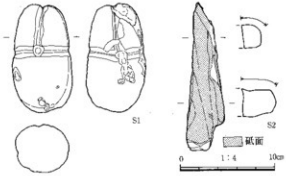


Fig. 12　黒褐色土（④層）出土遺物実測図（石器）

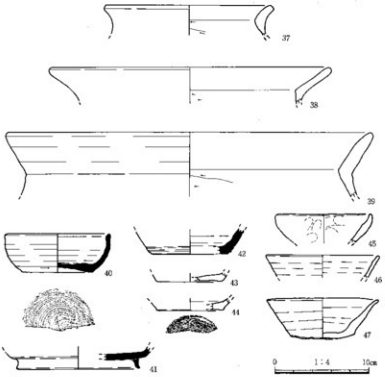


Fig. 13　黒色土（⑤層）出土遺物実測図

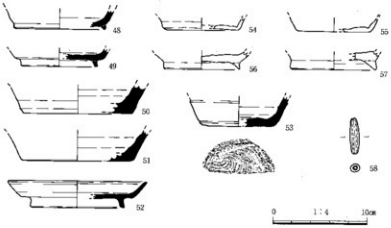


Fig. 14　やや暗い灰褐色土（③層）出土遺物実測図（土器）

Fig. 15　やや暗い灰褐色土（③層）出土遺物実測図（石器）

甕1はP-12、土師質の坏2はP-25から出土した。

(2)　黒色土(⑤層)出土遺物(Fig. 13)

⑤層中からは、少量の土器が出土し、このうち37～47を図化した。これらは本来的には遺構埋土中に存在していた可能性が高い。土師器45は、製塩土器の可能性がある。9世紀後半を主体とするが、須恵器40の如く8世紀後半頃まで遡りうる個体もある。

(3)　黒褐色土（④層）の遺物出土状況（Fig. 7）

地形は、№4グリッド付近の標高30.20mを頂部とする緩やかな尾根状を呈する。調査区西端部では、標高29.75m、東側では、№7杭から東側の傾斜は急になり、東端部では標高29.50mである。黒色土直上の④層より多量の遺物が出土した。土師器片約260点、須恵器片約150点である。分布は、№3グリッド周辺、№5～№6グリッド周辺の分布が密であり、№4グリッド以西には僅かである。

出土状況は、平面的には散在的であり、離れた地点における接合例もない。また、⑤層出土の土師質の坏47を除くと器形の半分以上を復元できる個体もない。須恵器・土師器の坏類、土師器の甕が大半を占める。

特徴的な遺物として、10世紀代に比定される緑釉陶器の口縁部と底部が出土した。百瀬正恒氏のご教示により、京都産とみられ、高橋分類のA2[12]に相当する可能性が指摘された。④層出土遺物は、須恵器12・18・21・26など9世紀の中頃に遡りうる資料もあるが、概ね9世紀後半～10世紀前半の所産が主体的である。ただ須恵器甕32は勝間田系の甕に類似し、混入の可能性がある。また、土師器の甕36は古墳時代前期の所産である。

4．まとめ

今回の調査で、9世紀後半～10世紀前半代の集落跡を検出した。⑥層上面で検出した遺構埋土中出土の土器と、④層出土の土器の様相に

ピット番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	遺　物
P-1	30	26	17.6	
P-2	57	57	16.4	
P-3	32	30	20.5	
P-4	48	38	14.2	
P-5	33	32	12.3	
P-6	29	21	14.7	
P-7	36	33	15.9	
P-8	22	20	11.9	
P-9	22	22	17.3	
P-10	40	20	33.6	
P-11	24	22	12.4	
P-12	26	24	23.1	土師器甕1
P-13	54	53	19.6	
P-14	50	44	21	
P-15	18	16	10	
P-16	20	17	14.8	
P-17	23	19	13	
P-18	20	17	10.5	
P-19	25	21	15.6	
P-20	29	24	8.2	
P-21	38	33	31	

ピット番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	遺　物
P-22	31	24	8.1	
P-23	25	20	14.4	
P-24	28	23	6	
P-25	47	42	19	土師質坏2
P-26	36	35	16	
P-27	32	25	26.2	
P-28	37	35	9.1	
P-29	33	20	13.3	土師器片
P-30	41	32	8.2	
P-31	42	37	15.5	
P-32	35	32	36.2	
P-33	29	16	8.7	
P-34	30	28	6.7	
P-35	30	27	7.7	
P-36	31	16	8.7	
P-37	43	37	11.9	
P-38	33	30	7	
P-39	29	23	8.7	
P-40	26	13	10.8	
P-41	52	48	26.5	

Tab. 1　ピット規模計測表

大きな差違が窺えないことから、本来的な遺構面は⑤層上面に存在するものと考えられる。調査区の南方約600mから南側において名和町教育委員会が行った調査（1999年度）により掘立柱建物群が検出されており、今回の調査区も、この集落の一部と想定される。

また、今回の出土遺物には2点の緑釉陶器が含まれる。県内では、国庁あるいは官衙遺跡などを中心に8遺跡から出土しており、集落の性格を考察するうえで示唆的な遺物である。

註

(1)　高橋照彦「Ⅲ 土器・陶磁器　3. 緑釉陶器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

遺物観察表

・焼成が堅致で青灰色を呈するものを須恵器と表記した。焼成が、須恵器と比較してやや甘く、灰白色を呈するものは土師質として表記した。

・口径・底部径は復元値、器高は残存値を示す。

・色調は、「新版　標準土色帖」2001年前期版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修　を使用した。

遺物No	遺構層位	Fig.、PL.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底部径(cm)	口縁・底部残存率	形態上の特徴および調整	胎　土	色　調	焼成	備　考
1	P-12	Fig. 10 PL. 25	土師器甕	29.0	3.2	—	1/10	口縁端部に面をもち、面の中央および内面端部付近がやや強いナデによりくぼむ	密　0.5～2㎜内外の砂粒と小粒の雲母を含む	灰黄褐色	良好	
2	P-25	Fig. 10 PL. 25	土師質坏	13.2	4.8	5.6	1/5	口縁部の器壁は薄く、端部がやや細くなる。口縁端部内外面が輪状に灰色化する	密　0.5～1㎜内外の砂粒を含む	灰黄色	良　軟質	
3	④層	Fig. 11 PL. 25	須恵器壺	12.0	3.2	—	1/8	断面の一部に焼けひずみあり。	密　0.5～1㎜程度の砂粒を多く含む	灰色	良好	
4	④層	Fig. 11 PL. 25	須恵器坏	14.0	2.9	—	1/12	口縁端部は丸くおわる。口縁部上半から端部にかけて強くナデる。	密　1㎜程度の砂粒を含む	灰色	良好	
5	⑥層	Fig. 11 PL. 26	須恵器坏	13.0	3.2	—	1/10	口縁部はわずかに外反し、輪状に黒色化する。	密	灰色	良好	内面に火襷状の痕あり。
6	④層	Fig. 11 PL. 25	須恵器壺	17.0	2.4	—	1/12	口縁部は外反し、端部はやや尖る。	密	灰色	良好	
7	④層	Fig. 11 PL. 26	須恵器坏	13.0	3.3	—	1/12	口縁部の器壁は薄く、端部がわずかに外反し丸くおわる。	密	黄灰色	良好	

Tab. 2　遺物観察表(1)

遺物No	遺構層位	Fig. PL.	器種	口径(cm)	器高(cm)	底部径(cm)	口縁・底部残存率	形態上の特徴および調整	胎土	色調	焼成	備考
8	④層	Fig. 11 PL. 25	土師器杯	15.0	3.3	—	1/16	口縁部は外傾して丸くおわる。	密　1mm以下の微細な砂粒を含む	橙色	良好	内外面ともに赤彩あり。
9	③層	Fig. 11 PL. 25	土師質杯(高台付)	13.3	5.9	17.4	1/8	口縁部はやや強いナデによる凹内をもつ。断面三角形状の高台を外面立ち上がり付近に貼り付ける。	密	灰白色	良好	軟質
10	④層	Fig. 11 PL. 26	緑釉陶器椀	14.9	2.4	—	1/12	口縁端部はわずかに外側に張り出す。外面体部は回転ケズリか。口縁端部付近は内外面ともに回転横ナデ。	密	断面：灰色 釉薬：緑灰色	良	京都産10世紀
11	④層	Fig. 11 PL. 26	緑釉陶器椀底部(高台付)	—	1.1	6.5	1/3	外面底部回転糸切り後ナデ。断面四角形の高台を貼り付ける。高台内側と接地面を除き淡黄緑色の釉がかかる。	密	断面：灰色 釉薬：淡黄緑色	良	京都産10世紀
12	④層	Fig. 11 PL. 25	須恵器蓋	14.9	2.1	天井部径9.5	1/14	口縁端部はわずかに外を向く。外面天井部に回転糸切り痕。口縁端部は輪状に灰色化する。	密	灰色	良好	
13	④層	Fig. 11 PL. 25	須恵器坏(高台付)	—	3.0	10.3	1/5	断面三角形状の高台を外面底部立ち上がり付近に乱雑に貼り付ける。	密	灰色	良好	
14	④層	Fig. 11 PL. 25	須恵器坏(高台付)	—	3.7	9.0	1/8	断面四角形の高台を外面底部やや内側にほぼ垂直に貼り付ける。	密	灰色	良好	
15	④層	Fig. 11 PL. 26	須恵器坏(高台付)	—	1.6	10.0	1/20	内外面ともに回転横ナデ。断面四角形の細い高台を外面底部やや内側にハの字状に貼り付ける。	密	灰色	良好	
16	④層	Fig. 11 PL. 25	須恵器坏(高台付)	—	3.6	9.5	1/16	断面四角形の高台を外面底部やや内側にハの字状に貼り付ける。	密	灰色	良好	
17	④層	Fig. 11 PL. 25	須恵器坏(高台付)	—	1.8	7.6	1/6	断面四角形の細い高台を外面底部やや内側にハの字状に貼り付ける。内面底部に自然釉付着。	密	外面：灰色 内面：灰黄色	良好	
18	④層	Fig. 11 PL. 25	須恵器坏(高台付)	—	2.6	7.2	1/4	断面四角形の高台を外面底部やや内側にハの字状に貼り付ける。	密	灰白色	良好	
19	④層	Fig. 11 PL. 25	須恵器坏(高台付)	—	2.5	8.6	1/4	外面底部回転糸切り後ナデ。断面四角形の高台を外面立ち上がり付近に乱雑に貼り付ける。	密	灰色	良好	
20	④層	Fig. 11 PL. 25	須恵器底部	—	1.6	8.2	1/4	外面底部に回転糸切り痕。	密　微細な砂粒を含む	灰色	良好	
21	④層	Fig. 11 PL. 26	須恵器坏(高台付)	—	2.0	7.8	1/8	断面四角形の高台を外面底部やや内側にほぼ垂直に貼り付ける。外面高台を除き灰色化。	密	灰色	良	やや軟質
22	④層	Fig. 11 PL. 26	須恵器底部	—	1.7	10.0	1/6	断面四角形の高台を外面底部やや内側にハの字状に貼り付ける。	密　微細な砂粒を含む	灰色	良好	
23	④層	Fig. 11 PL. 26	土師器坏(高台付)	—	1.7	9.2	1/6	外面底部は回転糸切りか。断面三角形の高台を外面底部立ち上がり付近にやや乱雑に貼り付ける。	密	にぶい黄橙色	良好	外面に赤彩痕あり。
24	④層	Fig. 11 PL. 26	土師器坏(高台部)	—	2.3	7.7	1/4	やや高い高台をハの字状に貼り付ける。	密	にぶい黄橙色	良好	
25	④層	Fig. 11 PL. 26	須恵器坏底部	—	3.5	11.6	1/5	外面底部切り離し後ナデ。	密	黄灰色	良好	
26	④層	Fig. 11	須恵器蓋	—	16.9	1.5	1/12	回転ヨコナデ	密	灰白色	良好	
27	③層	Fig. 11 PL. 25	土師器鉢	23.4	3.1	—	1/20	口縁部は外傾する。内面屈曲部以下ケズり。	密　0.5～1mmの砂粒を多く含む	黒褐色	良好	
28	④層	Fig. 11 PL. 25	土師器鉢	29.3	4.9	—	1/16	口縁部は外傾する。内面屈曲部以下ケズり。	密　1mm以下の微細な砂粒を多く含む	暗褐色	良好	
29	④層	Fig. 11 PL. 26	土師器甕	28.8	2.9	—	1/16	口縁部はわずかに外側に膨らみ、端部は外反する。外面縦方向、内面横方向のハケ目。	密	にぶい橙色	良好	
30	④層	Fig. 11 PL. 25	土師器鉢	29.8	5.2	—	1/16	口縁部は外傾して丸くおさめる。内面屈曲部以下ケズり。	密　0.5mm程度の砂粒を多く含む	黒褐色	良好	
31	④層	Fig. 11 PL. 25	土師器鉢	24.0	9.4	—	1/10	口縁部は短く外傾する。内面屈曲部以下左方向のケズり。	やや粗　0.5～1mm程度の砂粒を多く含む	外面：褐色 内面：赤褐色	良好	
32	④層	Fig. 11 PL. 26	須恵器甕	—	—	—	—	体部外面格子目タタキ。内面ハケ目。	やや粗　3～4mm大の砂粒を含む	灰色	良好	
33	④層	Fig. 11 PL. 25	土玉	長軸 2.35	短軸 1.8	重量 9.6g	—	断面は円形で、手づくね成形。	密	にぶい黄褐色	良	
34	④層	Fig. 11 PL. 26	土錘	長軸 0.95	短軸 3.7	重量 2.7g	—	断面は両端が細い円筒状で、手づくね成形。	密	にぶい黄褐色	良	
35	④層	Fig. 11 PL. 26	土錘	長軸 1.85	短軸 3.5	重量 8.6g	—	断面は楕円形状で、手づくね成形。	密	にぶい黄橙色	良	

Tab. 3　遺物観察表(2)

遺物No	遺構層位	Fig. PL.	器種	口径(cm)	器高(cm)	底部径(cm)	口縁・底部残存率	形態上の特徴および調整	胎土	色調	焼成	備考
36	④層	Fig. 11 PL. 25	土師器甕	16.9	4.5	—	1/16	内外面ともに横ナデ。	密	にぶい橙色	良好	
37	⑤層	Fig. 13 PL. 25	土師器甕	18.2	3.2	—	1/11	口縁部は短く外反する。内面屈曲部以下横方向のケズリ。	密	にぶい黄褐色	良好	外面に煤付着
38	⑤層	Fig. 13 PL. 25	土師器甕	30.0	3.8	—	1/24	口縁部は長く外傾する。内面屈曲部以下横方向のケズリ。	密　0.5～1 mm内外の砂粒と雲母を含む	明褐色	良好	外面体部～口縁部に炭化物付着。
39	⑤層	Fig. 13 PL. 25	土師器甕	39.0	6.8	—	1/16	口縁部は外傾する。内面屈曲部以下横方向のケズリ。	密	明赤褐色	良好	外面口縁部に炭化物付着。
40	⑤層	Fig. 13 PL. 25	須恵器坏	11.3	4.1	7.6	1/20	口縁部はわずかに外側に屈曲して丸くおわる。外面底部回転糸切り痕。	密	灰色	良好	
41	⑤層	Fig. 13 PL. 25	須恵器坏 (高台付)	—	2.3	13.1	1/7	細く高い高台を外面底部やや内側にハの字状に貼り付ける。	密	灰白色	良	やや軟質
42	⑤層	Fig. 13 PL. 25	須恵器 底部	—	2.6	8.2	1/5	外面底部に同転糸切り痕。	密	灰色	良好	
43	⑤層	Fig. 13 PL. 25	土師質坏 底部	—	0.9	7.0	1/6	外面底部に回転糸切り痕。わずかに高台の貼り付け痕か。	密	灰白色	良好	やや軟質
44	⑤層	Fig. 13 PL. 25	土師質坏 底部	—	1.3	7.2	1/4	外面底部回転糸切り痕。	密	灰黄褐色	良好	
45	⑤層	Fig. 13 PL. 25	製塩土器 か	10.0	3.0	—	1/8	手づくね成形。内面口縁端部付近を強くナデる。	密	にぶい褐色	良	二次焼成か
46	⑤層	Fig. 13 PL. 25	土師質坏	12.1	2.4	—	1/10	口縁部は外傾して丸くおわる。	密	浅黄橙色	良好	内外面ともに薄く赤彩。
47	⑤層	Fig. 13 PL. 25	土師質坏	11.9	4.3	6.8	1	口縁端部はわずかに外反する。外面底部回転ヘラ切り後板目。内面底部を輪状にナデる。	密	橙色	良好	
48	③層	Fig. 14 PL. 26	須恵器坏 (高台付)	—	2.1	9.8	1/6	断面三角形状の高台を外面底部の立ち上がり付近に貼り付ける。	密	灰色	良	やや軟質
49	③層	Fig. 14 PL. 26	須恵器坏 (高台付)	—	2.0	8.2	1/5	断面四角形の高台を外面底部やや内側に貼り付ける。	密	灰色	良好	
50	③層	Fig. 14 PL. 26	須恵器 底部	—	3.1	11.6	1/4	外面底部ナデ。内面輪状にナデる。	密	灰色	良好	
51	③層	Fig. 14 PL. 26	須恵器 底部	—	3.3	12.0	1/12	内面底部ナデ。	密	黄灰色	良好	
52	③層	Fig. 14 PL. 26	須恵器皿 (高台付)	10.0	2.9	10.0	1/4	やや高い断面四角形の高台を外面底部の内側にハの字状に貼り付ける。底面は内外面ともに丁寧な輪状ナデ。	密	灰色	良好	
53	③層	Fig. 14 PL. 26	須恵器 底部	—	3.2	7.5	1/3	外面底部回転糸切り痕。	密	灰色	良好	
54	③層	Fig. 14 PL. 26	土師質坏 底部	—	1.3	8.2	1/6	外面底部回転糸切り痕。	密　1 mm大の砂粒をわずかに含む	にぶい黄橙色	良好	
55	④層	Fig. 14 PL. 26	土師質坏 底部	—	1.5	7.7	—	外面底部回転糸切り痕。	密　1 mm大の砂粒を含む	にぶい黄橙色	良好	
54	③層	Fig. 14 PL. 26	土師質坏 底部	—	1.3	8.2	1/8	外面底部回転糸切り痕。	密　1 mm大の砂粒を含む	にぶい黄橙色	良	やや軟質
55	④層	Fig. 14 PL. 26	土師質坏 底部	—	1.5	7.7	1/6	外面底部回転糸切り痕。	密　1 mm大の砂粒を含む	にぶい黄橙色	良好	
56	③層	Fig. 14 PL. 26	土師器坏 (高台付)	—	1.9	8.1	1/8	断面三角形状の高台を外面底部寸ち上がり付近に貼り付ける。	密　1 mm大の砂粒を含む	にぶい橙色	良好	外面口縁部に赤彩。
57	③層	Fig. 14 PL. 26	土師質坏 (高台付)	—	1.9	9.2	1/8	断面三角形状の貼り付け高台。	密　1 mm大の砂粒を含む	にぶい橙色	良好	
58	③層	Fig. 14 PL. 26	上錘	長軸 1.05	短軸 3.8	重量 3.1g	1	両端が細い円筒状で、手づくね成形。	密	にぶい黄橙色	良好	
S 1	④層	Fig. 12 PL. 26	石錘	長軸 11.5	短軸 6.8	厚さ 5.1	重量 510g	礫状の磨り痕が1字状に周囲に巡る	石材：安山岩	—	—	
S 2	④層	Fig. 12 PL. 26	砥石	長軸 15.8	短軸 3.5	厚さ 3.0	重量 215g	片面に磨り痕、片側は欠損	石材：板状安山岩	—	—	
S 3	③層	Fig. 15 PL. 26	—	長軸 12.3	短軸 11.1	厚さ 5.1	重量 940g	長軸方向端部に敲打痕・剥離痕	石材：安山岩	—	—	

Tab. 4　遺物観察表(3)

第5章　考　　察

大塚岩田遺跡出土の弥生時代前期後半の土器について

1．分析の目的と方法

今回の調査で出土した遺物のうち、弥生時代前期後半（Ⅰ―4段階）[1]の所産として認識できる土器が約95パーセントを占める。当該期の資料は、西伯耆地域においても近年徐々に蓄積されつつあるが、基礎的な分析が必要な状況にある。ここでは、大塚岩田遺跡から出土した土器の情報整理を行うことにより、Ⅰ―4段階の土器を再認識し、今後の課題を設定することが目的である。

出土した前期後半の土器はコンテナ11箱である。分析に際しては、統計学的に明らかな分母不足であるため、ある程度まとまった個体数が出土したSD-1、SD-2、SD-5、遺構外（黒色土包含層）出土資料を対象とした[2]。出土した土器はほとんどが破片のため、個体数の算出は、口縁をカウントすることにより行った。同一個体とみられるものは可能な限り排除したが、若干の誤差は発生するものとみられる。資料化の方法として、まず器種ごとに型式分類、施文、調整技法の順に整理を行い、最後にまとめを行いたい。

2．器種構成

口縁から胴部最大径までの形態により分類した。資料的に制約があり、型式の細分化は行わない。

器種には、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、蓋形土器、鬲形の土製品がある。壺形土器、甕形土器の2器種で全体の9割近くを占める。

3．壺形土器

(a)　形態　調査区内から29個体が出土した。口縁から頸部までの形態により、次の6種類に分類した。

広口壺A：口縁部は短く外反し、胴部まで連続的に屈曲するもの。(SD-1　№12・13、SD-2　№45、遺構外　№133)

広口壺B：口縁部はやや長く外反し、口縁部から胴部が緩やかに屈曲するもの。(SD-2　№42、遺構外　№132)

広口壺C：口縁部は短く外反し、頸部が短い筒状をなすもの。(SD-5　№66・69)

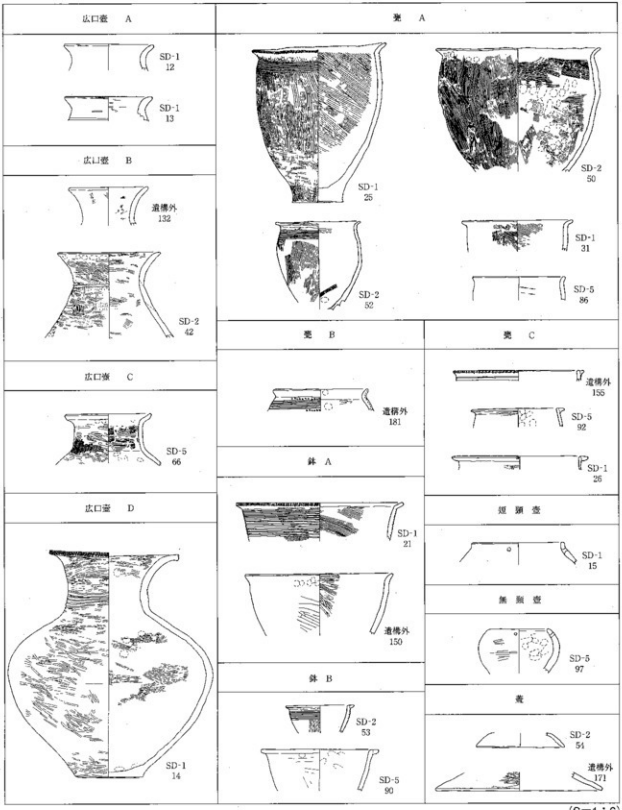
広口壺D：口縁部は大きく外反し、頸部は短い筒状をなすもの。(SD-1　№14)

短頸壺　：口縁部は短くほぼ直立し、胴部が大きく張り出すもの。(SD-1　№15、遺構外　№137)

無頸壺　：口縁が内湾し、胴部が扁球形を呈するもの。(SD-5　№97)

広口壺Aは、口径が15cm前後のものである。SD-2出土の№45は、器高に対して胴部があまり張り出さないタイプであり、後のⅡ様式に主体をなす器形である。対して、SD-2出土№42は胴部最大径が器高の中心からやや下方にあると想定され、Ⅰ-3段階以前の比較的古い形態を残す。SD-2出土の土器群は、一括資料と考えうる状況で出土しており、この2個体もほぼ同時に使用されたとみられる。口縁部のみの破片で口径が20cm前後、大きく外反する口縁をもつものは、壺Dに属する可能性がある。

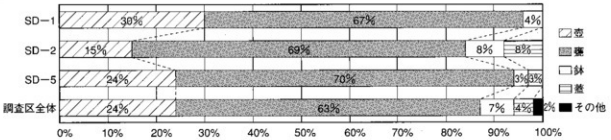
(b)　施文　壺形土器の施文は、佐原　眞によるⅠ様式の古段階、中段階、新段階の細分以降、編年の基準とされてきた。本資料群においては、体部に貼り付け突帯、頸部および胴部にヘラ描き沈線、貝殻腹縁による羽状文、口縁端部に有軸羽状文がみられる。前期前半に盛行する口頸部界・頸胴部界に段をもつもの、あるいは体部に木葉文を施す個体はない。ただ、SD-2出土の壺42には、段の退化とみられる1条の沈線が施されている。体部に貼り付け突帯が施されているものは、SD-5出土の№72のみである。削り出し突帯は皆無である。口縁端部に有軸羽状文が施されているものは、SD-1（№10・14）、SD-5（№67）、遺構外出土（№138～142）である。確認で



(S=1:6)

図1　土器分類図

きるものはすべて横方向の沈線の後にナナメ方向のキザミを施す。キザミの断面に木目とみられる痕跡が認められることから、木製の原体を使用したものと考えられる。№138を除くと、口径が20cmを越えており、広口壺Dもしくは広口壺Bに施されたとみられる。貝殻による施文は、おもに二枚貝の腹縁部の押圧によって行われる[11]。本資料では、SD-5出土№95、遺構外出土№186・187の3点にみられる。いずれも壺の胴部の一部とみられ、頸部から胴部最大径に至る部位に貝殻で羽状文を施し、その直上もしくは直下に2～6条程度のヘラ描き沈線を施



器種組成①

	壺	甕	鉢	蓋	その他	計
SD−1	8	18	1	0	0	27
SD−2	2	9	1	1	0	13
SD−5	8	23	1	1	0	33
調査区全体	29	76	8	5	2	120

（数字は個体数）

器種組成②

図2　器種組成

す。口縁端部に１条の浅い沈線のみを施すものも２個体（№45・133）ある。

頸部にヘラ描き沈線文を施すものは18個体あり、図３に整理した。複数条を一度に描いた痕跡は窺えない。各遺構ともに５条前後の沈線を施した個体が存在し、SD−5では最大11条を施したものがある。

(c)　**調整**　口縁もしくは胴部上半が残存する個体について調整技法の観察を行った。器面調整は、基本的に内外面とも①縦またはナナメ方向のハケ、②ナデ、③横方向のミガキの３種によってなされている。この３種が、ともに確認できる場合は全て①→②→③の順序でなされている。ハケはその始点における工具の痕跡から、木製の板状工具の小口部分を使用したとみられる。口縁部周辺の指紋の残存から、口縁部のナデは手指によるものと想定される。底部付近には、縦方向に軽いナデが施されているものがあり、板状工具によると想定される。

口縁のみの個体の場合、必ずしも器面全体の手法を反映させたものかどうか不明瞭である。また、前段階の調整は基本的に消されるため、次段階の調整が丁寧な場合は確認できない。このため、前段階の調整の欠如は確実とはいえない。なお、型式による調整の区別はみられない。

外面　①→②→③　5（壺の約17%）　②　9（壺の約31%）
①→②　2（壺の約７%）　③　3（壺の約10%）
②→③　8（壺の約28%）
①→③　4（壺の約14%）
①　1

内面　①→②→③　3（壺の約10%）
②→③　13（壺の約45%）
①→③　1
②　8（壺の約28%）
③　4（壺の約14%）

４．甕形土器

(a)　**形態**　調査区内から76個体が出土した。以下の３種類に分類した。

甕Ａ：口縁部が「く」字状に短く外反し、胴部がやや張り出すもの。（甕B・Cを除く甕形土器）

甕Ｂ：口縁部が「く」字状に短く外反し、胴部が口縁部径をこえて大きく張り出すもの。（遺構外№181）

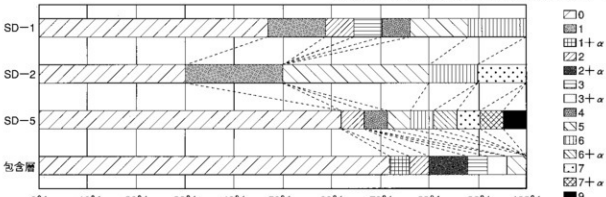
甕Ｃ：口縁部が「逆L」字状を呈するもの。（SD−1　№26、SD−5　№91・92・94、SD−7・8　№120、遺構外　№151〜158）

それぞれの遺構内での出現頻度を

	甕A	甕B	甕C	計
調査区全体	61（82%）	1（1%）	13（17%）	75（100%）
SD−5	18（86%）	0	3（14%）	21（100%）
SD−2	7（100%）	0	0	7（100%）
SD−1	15（94%）	0	1（6%）	16（100%）

（数字は個体数）

表１　甕形土器組成表



甕形土器体部の沈線文数①

	沈線 0	沈線 1	沈線1＋α	沈線 2	沈線2＋α	沈線 3	沈線3＋α	沈線 4	沈線 5	沈線 6	沈線6＋α	沈線 7	沈線7＋α	沈線 9	計
SD−1	8	2	0	1	0	1	0	1	2	2	0	0	0	0	17
SD−2	3	2	0	0	0	0	0	0	3	1	0	1	0	0	10
SD−5	13	0	0	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	21
包含層	18	0	1	1	2	1	1	0	1	0	0	0	0	0	25

（数字は破片点数）

甕形土器体部の沈線文数②

	沈線 0	沈線 1	沈線1＋α	沈線2＋α	沈線3＋α	沈線4＋α	沈線 5	沈線5＋α	沈線 6	沈線11	計
SD−1	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	4
SD−2	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2
SD−5	2	0	1	0	0	0	0	0	1	1	5
包含層	1	1	0	1	0	1	0	1	2	0	7

（数字は破片点数）

※＋αは欠損による条数不明個体をさす。

壺形土器体部の沈線文数

図3　ヘラ描き沈線文の条数

表1にまとめた。いわゆる如意形口縁の甕Aが全体の8割以上を占める。口縁部は粘土を外反させることにより形成する。大型、小型、口縁部の形態などによりさらなる細分も可能であろう。甕Cの口縁の形態は、口縁端部の外面に粘土紐を貼り付ける手法から生じており、いわゆる瀬戸内型甕と呼ばれるものである。調査区内で13点が出土した。遺構外出土№182は甕Cには属しないが、口縁端部に断面台形状の粘土紐を貼り付けており、手法としては甕Cと同様である。

(b) **施文**　甕形土器の施文には、胴部上端にヘラ描きによる沈線、口縁端部に施される縦方向のキザミが主体をなす。若干ではあるが、口縁端部に一条の浅い沈線を施すもの（SD−1　№22・23）、沈線文の上下に刺突文（遺構外　№181・183・184・189）・竹管文（遺構外　№182）を施文する個体もある。頸胴部界に段をもつものはない。

胴部上端に施される沈線について図3にまとめた。頸部のみの破片であっても壺として特定できるものについてはカウントした。複数条を一度に描いた痕跡を窺える個体はない。SD−1では沈線を施さないものが5割以下、最大6条が施されている。SD−2でも、5条、6条のものが計3個体出土している。SD−5では、沈線を施さないものが6割を超える。沈線を施すものの中では、№73を除くとすべて5条以上であり、最大11条を施す個体もある。

口縁端部のキザミは、おもに縦方向、斜め方向に施されている。断面はV字形をなし、器面に直交する方向から施すものが大半であるが、SD−5出土№79の如く斜め方向から原体を押圧したものもある。断面に木目とみられる痕跡が認められることから、原体は木製と考えられる。SD−1で5個体（№16・17・19・20・25）、SD−2で3個体（№46〜48）、SD−5では6個体（№75〜80）ある。キザミ、胴部上端に沈線文をともに施すものは、SD−1では5個体すべて、SD−2は2個体（№46・47）、SD−5では3個体（№75〜77）である。

逆に、全く施文されないものについて分析する。SD−1では、甕の44％にあたる7個体、SD−2では、甕の14％

にあたる1個体、SD-5では甕の52%にあたる11個体が無文である。

(c) **調整**　口縁部が残存する個体について、器面調整の観察を行った。おもに①縦・ナナメ方向のハケ、②ナデが施されている。まれに外面底部付近、および内面口縁部に③横方向のミガキが施されるものがある。確認できるものはすべて①→②の順序で施される。口縁部における最終的な調整はおもに横方向のナデであるが、前後関係が確認できるものは器面調整の最後になされたとみられる。なお、完形品を除く底部や、調整不明の個体は排除した。

外面	①→②	48(甕の約66%)	① 1（甕の約1%）	内面 ①→②	29（甕の約40%）
	①→②→口縁部③	1（甕の約1%）		②	29（甕の約40%）
	①→②→胴部下半③	1（甕の約1%）		②→口縁部③	5（甕の約7%）
	②	17(甕の約23%)		①	2（甕の約3%）

5．鉢形土器

(a) **形態**

鉢A　口縁部が短く外反し、胴部が直線的または緩いカーブですぼまるもの。(№3・21・150・166・167)

鉢B　口縁部が「逆L」字状を呈し、胴部が直線的にすぼまるもの。(№53・90・165)

甕形土器に比して、想定される器高に対する口径の比率が大なものを鉢形土器とした。全てが破片であるため、甕形土器との若干の誤認は想定される。鉢Aは、SK-1、SD-1、遺構外から出土し、鉢Bは、SD-2、SD-5、遺構外から出土した。鉢Bの口縁形態は、口縁に粘土紐を貼り付けることから生じており、甕Cと同様の手法である。

(b) **施文・調整**　鉢Aでは、SD-1出土№21のみヘラ描き沈線文12条、口縁端部のキザミをもち、他の4個体は無文である。鉢Bは、SD-2出土№53のみヘラ描き沈線文5条を施し、他の2個体は無文である。調整は、基本的に甕形土器と同様であり、内外面ともハケ→ナデのものが4個体、ナデのみが2個体、ナデ→ミガキが1個体である。鉢A・Bによる区別はみられない。

6．蓋形土器

(a) **形態**　「ハ」字状に大きく開くものを蓋形土器とした（№54・96・169～171)。口径が10～16cmのもの、27cmのものに分かれる。

(b) **調整**　指による整形、調整がみられるもの1個体、ハケ→ナデが1個体、ナデ→ミガキ1個体、ハケ→ミガキ1個体など個体差がみられる。

7．まとめ

SD-1・2・3・4・6はほぼ平行して掘削されており、状況証拠ではあるがこれらが同時に機能した可能性が指摘できる。SD-5は、SD-3・4の埋没後に掘削されていることが確認できるが、土器の形態、施文、器面調整の分析からは後出的要素は指摘できない。今回の調査で出土した土器は、ヘラ描き沈線文が各遺構とも5条以上のものがみられ、段・削り出し突帯の消失、有軸羽状文の盛行からみてⅠ-4段階の所産とみられ、様相が比較的一様な土器群といえる。以下、管見による現状での課題を簡潔に記し、まとめとしたい。

SD-2は、出土状況からみて一括資料と判断できるが、比較的古い様相を呈するものと新しい様相を呈する個体がある。Ⅰ-3以前の形態を残す広口壺42とⅡ様式に盛行する形態の広口壺45が共伴する。

一方、ヘラ描き沈線文の分析においては、多条の沈線を施す個体と同時に1・2条のものも同時に存在し、5条以上のヘラ描き沈線文が施されるものは120個体中23個体（約20%）と比較的少ない。Ⅰ-4段階の環濠が出土した西伯町清水谷遺跡では、報告書に掲載されている54点の土器（底部を除く）のうち、5条を超える個体が約20個体（37%）、このうち10条を越えるものは3個体確認できる。

こうした一括資料とみられる土器群内での型式差や、遺跡ごとに異なる沈線文の多条化現象が、時間的な差違

によるものなのか、遺跡を形成した集団の性格を反映したものなのか、今後の検討してゆくべき課題である。

弥生時代前期後半は、それ以前の遠賀川式土器の斉一的な様相から地域性が顕在化する時期として認識されている[30]。こうした地域性を表出する遺物のひとつとして認識されているのがいわゆる瀬戸内型甕がある。本遺跡での分類の甕C、鉢Bタイプにあたる。秋山浩三の分析によれば、その分布は北九州、瀬戸内海沿岸から山陰の一部、伊勢湾沿岸に至る。とくに播磨、備前、讃岐、伊予を中心とする瀬戸内海沿岸地域においては多くの遺跡で50％以上の出現頻度を示す。本遺跡の南西方約１㎞に位置する上野第１・第２遺跡では、若干中期に属するものも含まれるようだが、それぞれ20.3％、24％、環濠が出土した淀江平野の今津岸の上遺跡では51％に達する。瀬戸内地域からの影響によるものかどうか現状では判断し難いが、同時期の各遺跡における出現頻度に大きな落差が存在することは、Ⅰ－４段階での地域性を検討するうえで看過できない問題である。

遺構について多くを触れられなかったが、西日本においてⅠ－３～Ⅰ－４段階に激増する環濠の機能は、遺構の形態、出土する土器、石器、礫などから複合的に検討されねばならない。

参考文献は割愛させていただいた。

本報告書作成にあたり、第２回西伯耆弥生集落検討会での検討内容を反映させた部分がある。末筆ながら、関係諸氏に深く感謝します。

註

(1) 弥生時代前期における編分は、1932年の小林行雄による古相、新相の２期区分に端を発する。その後、佐原眞により設定された壺形土器の段、削り出し突帯、貼り付け突帯を指標とする３時期区分が主流をなしたが、近年、削り出し突帯と貼り付け突帯の共伴、削り出し突帯と多条化した沈線が共伴する例の存在などから時期区分としての有効性に若干の疑義が生じている。本遺跡では、前期後半においては多様な器種に施され、かつⅡ様式の指標となる梅描き文の発生を助長したとみられるヘラ描き沈線文を指標とする方がより実態に即するものと考えた。従って、松本岩雄編年の４時期区分をおもに採用している。時期を限定することが遠当でないと判断される場合には、Ⅰ-３～Ⅰ-４段階の意で前期後半と表現している。

(2) 対象遺物の抽出にあたっては、基本的に遺構埋土中出土のものを前提としたが、本来的な方法ではないことは承知のうえで、一部について遺構外（黒色土包含層）出土遺物を援用した。これは、土器群のもつバリエーションが組成中に反映することを期待したものであり、前期を逸脱した遺物が明確に排除できるとの判断による。

(3) その分布は、北九州遠賀川流域以東から山口県西部の響灘周辺を中心として、日本海側では丹後半島、瀬戸内海沿岸では畿内におよぶ。

(4) 秋山浩三　1992「３．弥生前期土器」『吉備の考古学的研究』（上）　山陽新聞社

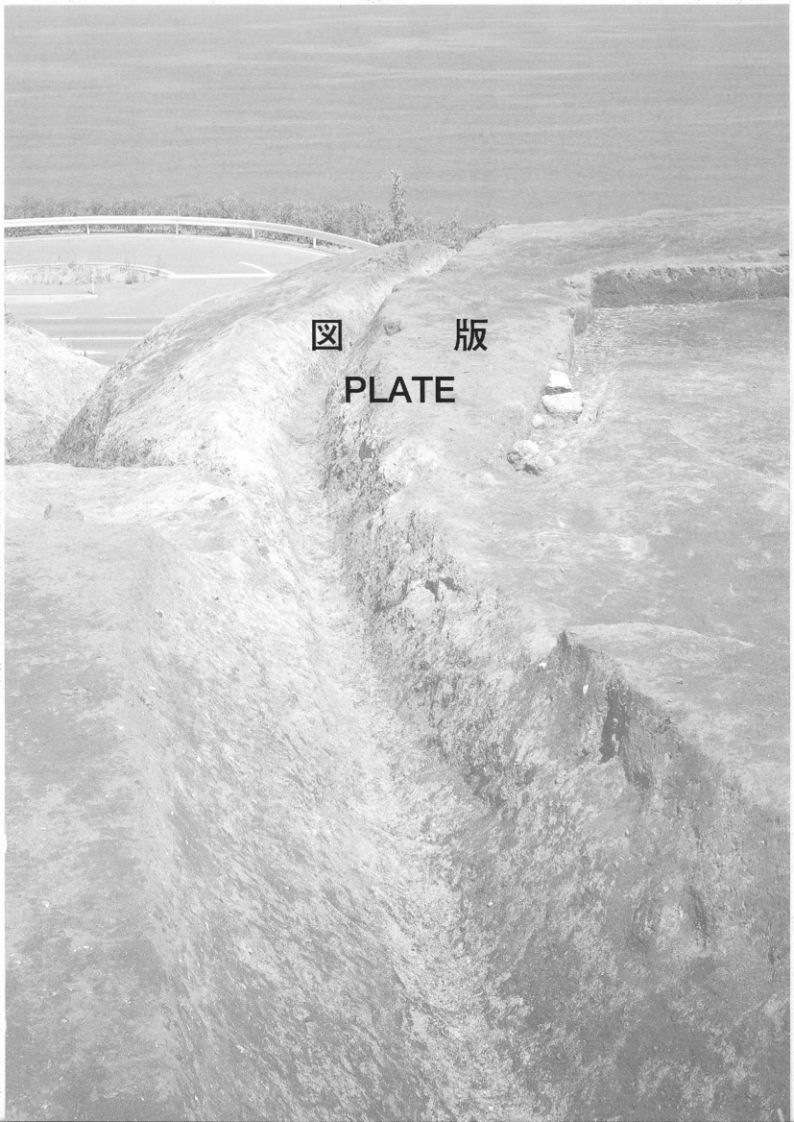
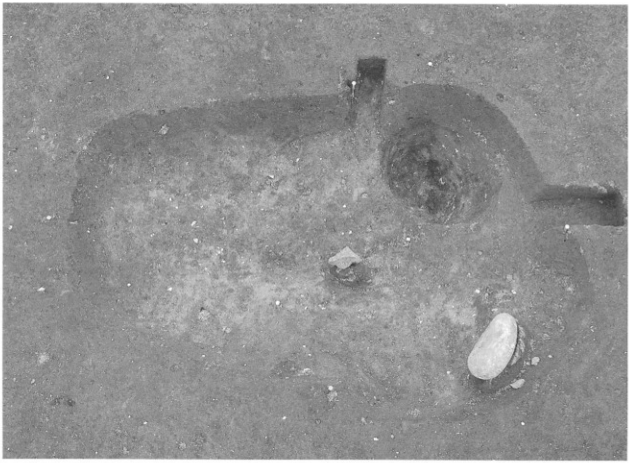


図　　版
PLATE

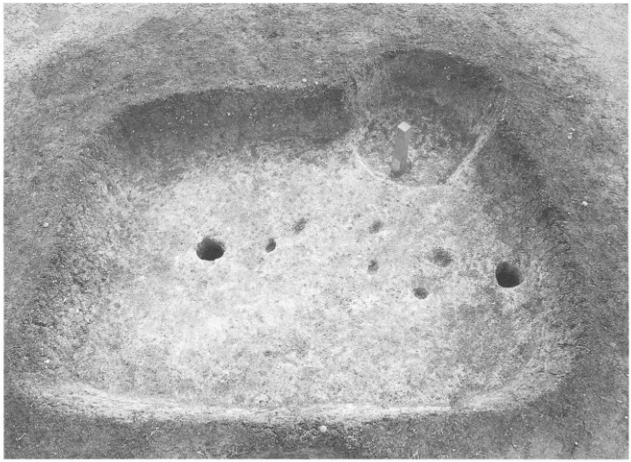
1. 調査地空撮（北から）

2. 調査地空撮（北から）

1. SI-1完掘状況（北から）



2. SI-1内SK1 遺物出土状況（北から）



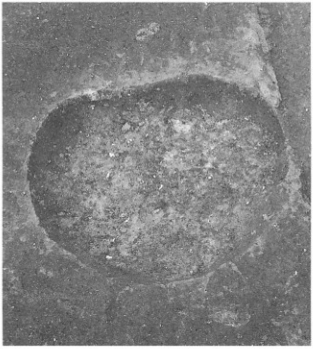
1. SK-1完掘状況（北東から）

2. SK-1底面遺物出土状況（北東から）

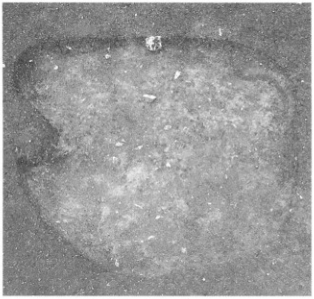
PL.4　大塚岩田遺跡

1．SK-2完掘状況（南東から）

2．SK-3土層断面（北西から）

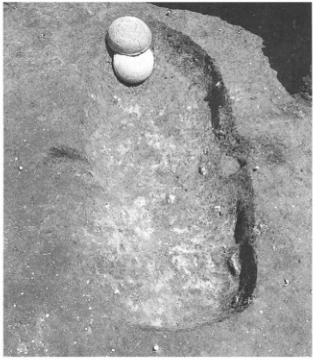


3．SK-4 完掘状況（南西から）



4．SK-5完掘状況（西から）

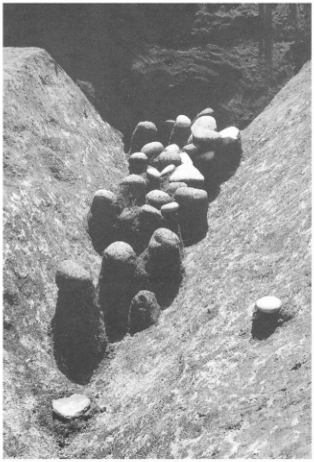
5．SK-6遺物出土状況1（北東から）



6．SK-6 遺物出土状況2（北西から）

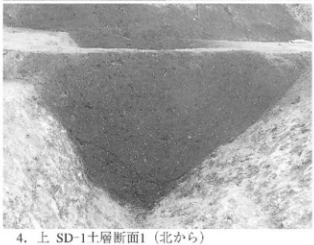
1. SD-1完掘状況（南から）

3. SD-1土器出土状況（南西から）



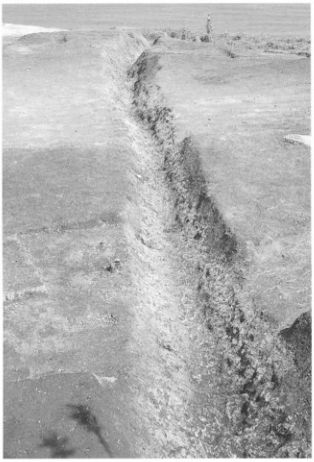
2. SD-1礫出土状況（北から）

4. 上 SD-1土層断面1（北から）



5. 下 SD-1土層断面2（北から）

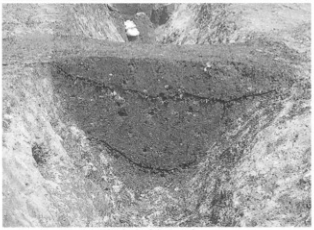
SD-2遺物出土状況（北から）



1. SD-2完掘状況（南から）

3. SD-3完掘状況（南から）

2. SD-2遺物出土状況（南から）

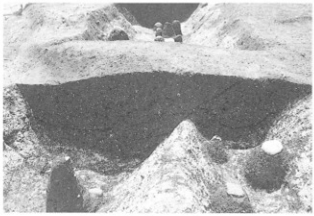


4. 上 SD-2土層断面（南から）
5. 下 SD-3土層断面（南から）

PL.8　大塚岩田遺跡

1. SD-4・5・6完掘状況（南から）

2. SD-5完掘状況（北から）



3. SD-5・4上層断面（北から）

4. SD-5上層断面（北から）

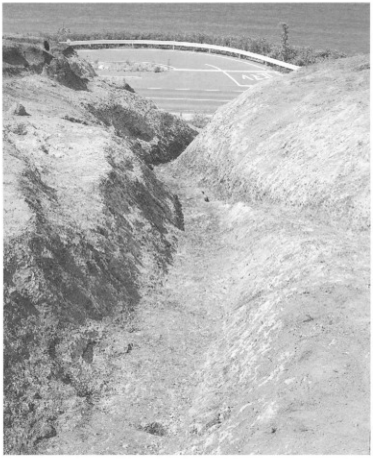
1. 調査地東側完掘状況（南西から）

2. SD-5遺物出土状況（南から）

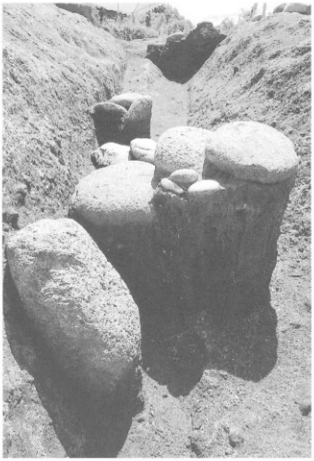
3. SD-5礫出土状況（北から）

PL.10　大塚岩田遺跡

1．SD-1・7・8完掘状況（南東から）



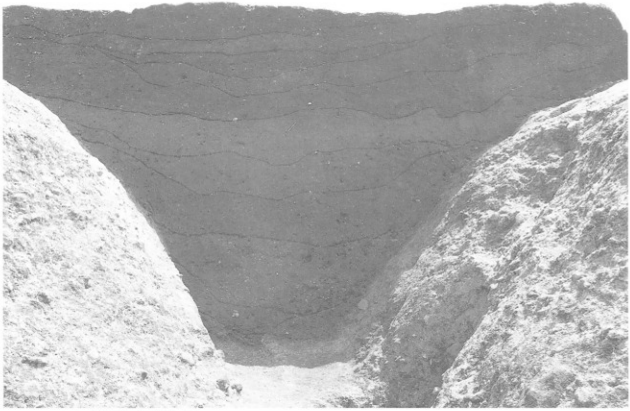
2．SD-7・8完掘状況（南から）



1. SD-8礫出土状況（北から）

3. SD-7土層断面（南から）

4. SD-7・8土層断面（北から）

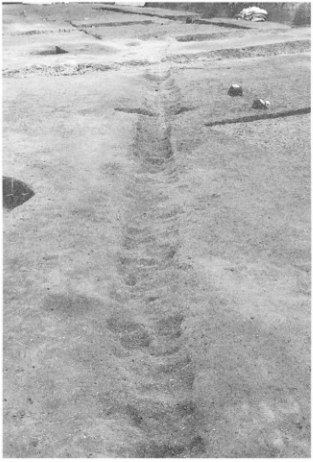


2. SD-7・8土層断面（北から）

PL.12　大塚岩田遺跡

1. SD-9礫出土状況（南から）

3. SD-10完掘状況（南から）



2. SD-14完掘状況（西から）

3. SD-9土層断面（南から）

5. SD-10土層断面（北西から）

14

52

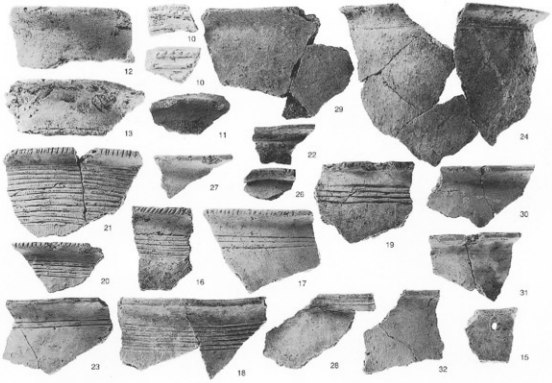
25

42

50

45

SD-1（14・25）、SD-2（42・45・50・52）出土遺物



1. SD-1出土遺物

2. SD-1出土礫（一部）

3. SI-1内SK1出土石材チップ

4. 遺構外出土土師形土製品

1．遺構外出土遺物①

2．SD-1出土遺物（土器底部）

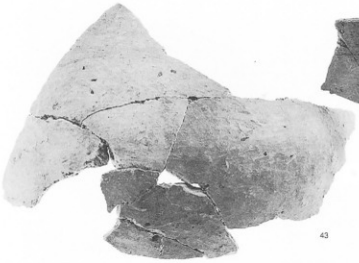
3．SD-1（S5～S10）、SD-7・8（S25～S29）出土礫石器

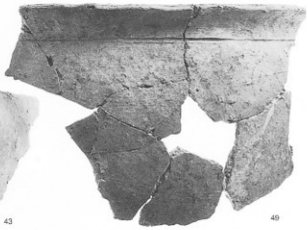
SI-1（S1）、SK-1（S3）、SD-2（S14）、SD-5（S15～S21）、遺構外（S34）出土礫石器

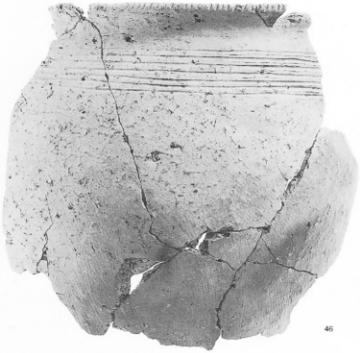
1. 遺構外出土遺物（表面）②

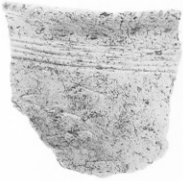
2. 遺構外出土遺物（裏面）②

3. SD－1（S11･S12）、SD－2（S13）、SD－5（S22･S23）、SD－7（S24）遺構外（S31～S33）出土石器、遺構外出土石材


43


49

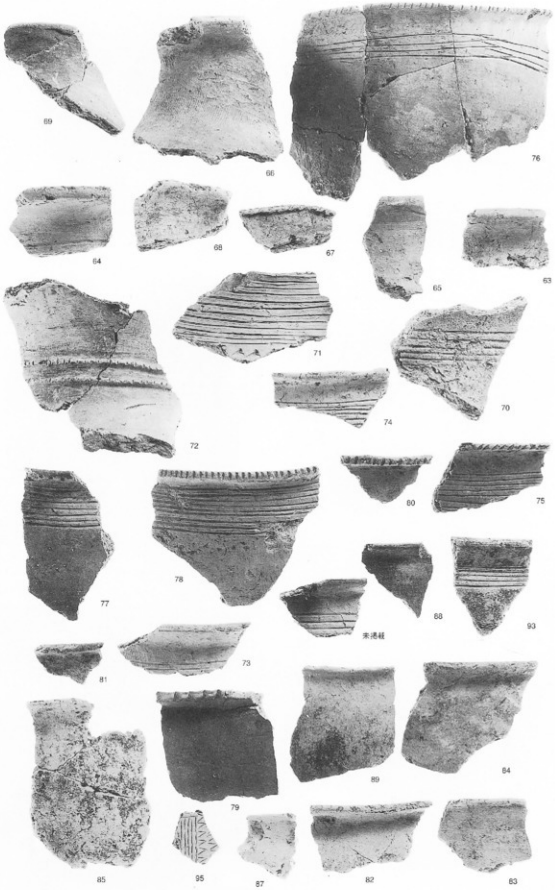

46


48

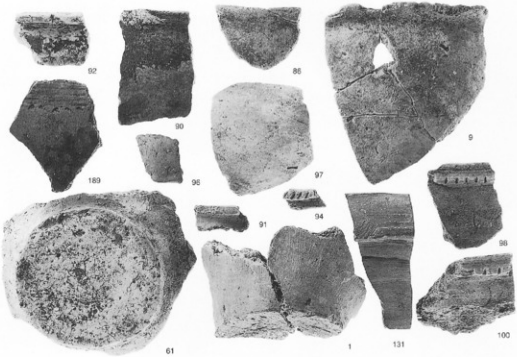
51

SD-2出土遺物

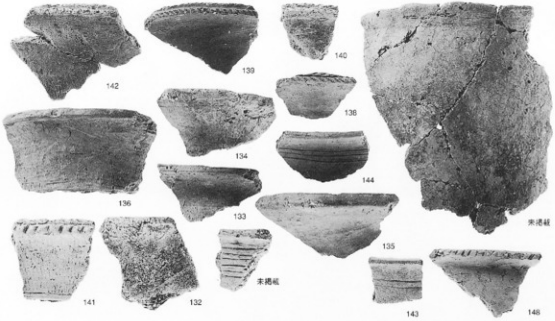
SK-1（2・S2・S4）、SK-6（7・8）、SD-3（60）、SD-6（117）出土遺物


89
66
76
64
68
67
65
63
71
72
74
70
60
75
77
78
88
93
来港経
81
73
89
84
79
85
95
87
82
83

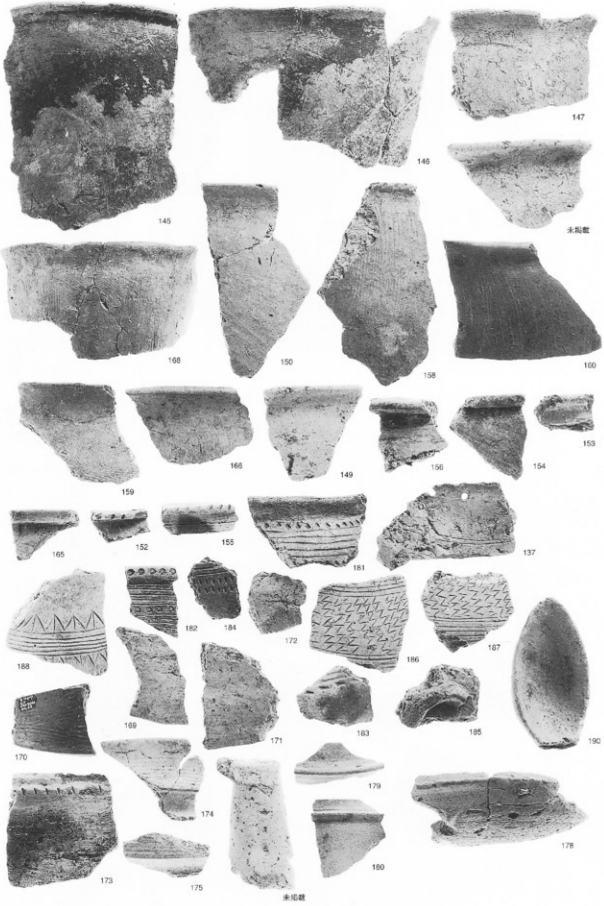
SD-5出土遺物



1. SI-1(1)、SK-7 (9)、SD-4 (61)、SD-5 (86·90～92·94·96～98·100)、SD-9 (131)、遺構外 (189) 出土遺物

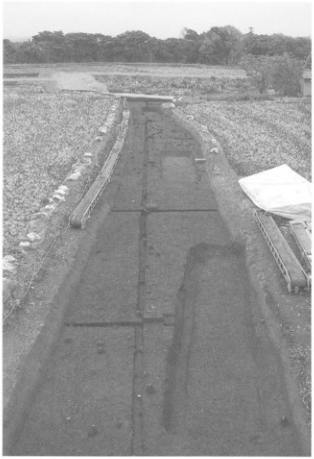


2. 遺構外出土遺物 ③

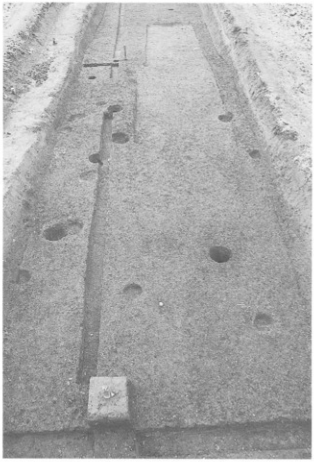

145
146
147
未掲載
168
150
158
160
159
166
149
156
154
153
165
152
155
181
137
188
182
184
172
186
167
190
169
171
183
185
170
174
179
178
173
175
180
未掲載

遺構外出土遺物 ④

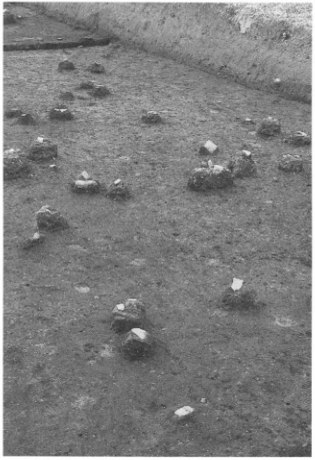
暗褐色土（⑥層）上面遺構完掘状況（東から）



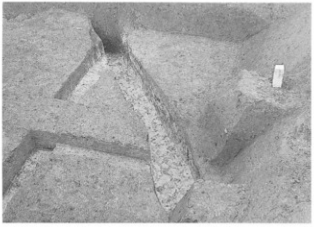
1. 黒色土（⑤層）上面検出状況（東から）



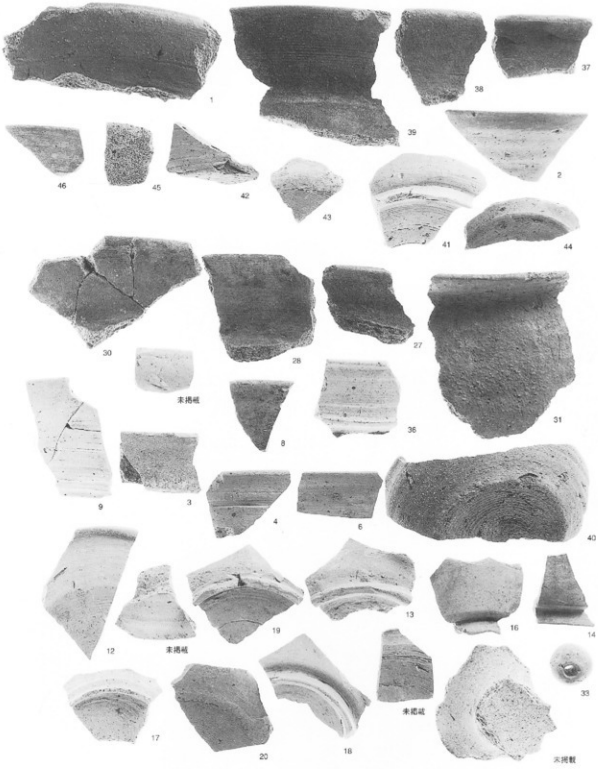
3. 暗褐色土（⑥層）上面遺構完掘状況（東から）



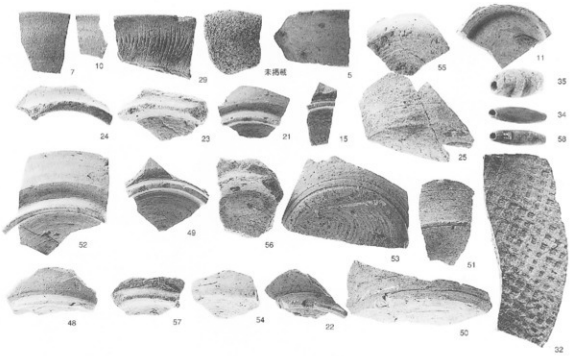
2. 黒褐色土（④層）遺物出土状況（東から）



4. 上 SD-1完掘状況（東から）
5. 下 SD-1土層断面（北西から）



ピット堀土中（1･2）、⑤層（37～46）、④層（3･4･6･8･9･12~14･16～20･27･28･30･31･33･36）出土遺物



1．黒褐色土（④層、5･7･10･11･15･21～25･29･32･34･35）、灰褐色土（③層、48～58）出土遺物

2．④層（S1･S2）、③層（S3）、⑤層（S4･S5）出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおつかいわたいせき　おおつかつかねいせき
書名	大塚岩田遺跡　大塚塚根遺跡
副書名	一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書
シリーズ番号	71
編著者名	西川徹、岡野雅則
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター
所在地	〒680-0151　鳥取県岩美郡国府町宮下1260
発行年月日	西暦2001年（平成13年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大塚岩田遺跡 おおつかいわたいせき	鳥取県西伯郡 とっとりけんさいはくぐん 名和町大字 なわちょうだいあざ 大塚字岩屋 おおつかあざいわや	31378	2	35度 29分 39秒	133度 28分 19秒	20000605 ～ 20000811	1,835.62㎡	一般国道9号（名和淀江道路）の改築
大塚塚根遺跡 おおつかつかねいせき	鳥取県西伯郡 とっとりけんさいはくぐん 名和町大字 なわちょうだいあざ 大塚字塚根 おおつかあざつかね	31378	296	35度 29分 38秒	133度 28分 27秒	20001010 ～ 20001121	616.32㎡	一般国道9号（名和淀江道路）の改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大塚岩田遺跡	集落	弥生時代前期 古墳時代後期	建物　1 土坑　7 溝状遺構　14 ピット	弥生土器 土師器 須恵器 磨製石斧 礫石器	弥生時代前期の溝状遺構は環濠の一部か
大塚塚根遺跡	集落	平安時代	土坑　1 溝状遺構　1 ピット	土師器 須恵器 緑釉陶器	

鳥取県教育文化財団調査報告書　71

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡名和町

大塚岩田遺跡

大塚塚根遺跡

発　行　2001年3月31日

編　集　財団法人　鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151　鳥取県岩美郡国府町宮下1260

電話（0857）27－6711

発行者　財団法人　鳥取県教育文化財団

印　刷　勝美印刷株式会社